

## ステージレース三陸311 ～リアス海岸を311km走るレースをつくる～

中尾 益巳



10年前、2011年4月末。私は、東日本大震災の復旧活動のボランティアに参加していた。短い期間だったが、宮城県南三陸町から岩手県陸前高田市へ。そして車で北上し、宮古市まで移動した。津波の大被害からまだ1ヶ月余り。三陸地方の基幹道である国道45号線は至る所で破壊され、何度となく迂回や片側通行を余儀なくされた。瓦礫の上を走りパンクもした。しかしこの道を走ったことで、私は初めて三陸地方・リアス海岸の地形を知ることができた。

「リアス海岸」と呼ばれながら、地形的には山である。基本的に街と街との間は山で仕切られている。国道の海拔は高いところでも200m前後だが、当然、ある程度の標高になると津波の被害は全くない。海沿いに切り立った崖からは、見渡す限りの太平洋を望める。あの海の向こうから巨大津波が襲って来たのか、と思うと恐ろしくなるが、穏やかになった海と急峻な山の風景には、ここでしか見られない美しさがあった。しかし山を下れば、そこは再び被災地。街はみな港町であり、海沿いの地域はほぼ全ての建物がなくなって瓦礫が積み重なっている。山と街の対照的な光景に衝撃を受けながらも、私は、いつの日かこの地域が復興したら、ここで「海を見ながら山を走る」長距離のランニングレースをつくりたい、と思い始めていた。



その頃の私は「ウルトラトレイル・マウントフジ (UTMF)」という富士山一周160kmを走破する日本最大規模のトレイルランニングレースの実行委員として準備に奔走していた。自らはマラソンや登山などとは無縁の生活を送ってきたが、前職であるNHKプロデューサーとして、ヨーロッパアルプ

スの最高峰モンブランを一周するトレイルランニングレースのドキュメント番組を作ったのをきっかけに、ランナーたちが限界に挑戦する超長距離レースに魅せられてしまったのだ。UTMFは翌2012年から始まったが、毎年大会の準備に追われながら、その一方で三陸の風景が頭から離れなかった。

私は年に一度は三陸を訪ね、土地の高上げや防潮堤工事で変わっていく街の姿と、決して変わらぬリアスの絶景を見ながら考え続けた。この土地でレースを開くならば、復興した街々を訪ね歩く、いや訪ね走る、旅のようなレースにしたい。そこで数日間かけて宿泊しながら移動していく「ステージレース」の形式にし、「3.11を忘れないため、全長311kmのコースにしよう」と構想は募っていった。そして2019年、その構想に賛同してくれた仲間たちと「ディスカバー・リアス」というNPOを設立。本格的に準備を始めたが、その矢先に新型コロナウイルスの感染が拡大。東京オリンピック・パラリンピックをはじめほとんどのスポーツイベントが延期もしくは中止。そう簡単にはレースを行えない状況となった。

しかし今、私はこんな状況の中で、逆にこのイベントの価値を見出している。地球規模の大感染で世界中が落ち込んでいるときだからこそ、あの未曾有の大災害から立ち直ってきた三陸を走ること、今の日本を、そして世界に少しでも元気と勇気をもたらすことができるのではないだろうか、と。大それた考えかもしれないが、それだけのパワーと魅力が三陸という地域にはあると私は信じている。

とは言え、今年は大人数のランナーが数日間も宿泊しながら走り続けるレースの開催は難しい。人数や距離を減らし、感染リスクの低い小規模なイベントに計画を変更した。311kmを走るのは来年以降の目標になるが、国内外のランナーが三陸に集まり、リアスの海と山を見ながら、三陸をつなぐ旅ができるようにしたい。順調ではない社会状況の中でこのレースを作っていく活動も、また一つの旅である。

(特定非営利活動法人ディスカバー・リアス 代表理事)